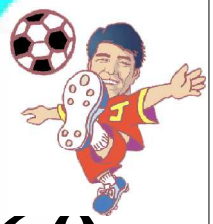
文・編集・発行 / 斉藤新緑　Tel〈0776-82-1141〉　Fax〈0776-82-2261〉
【斉藤新緑事務所】〒913-0046　福井県坂井市三国町北本町2-1-20 京福三国ビル２F
【e-mail】sinryoku@aurora.ocn.ne.jp
【ホームページ】http://www.ss.apdw.jp

ほっとらいん



人に、まちに、いま、元気の種をまこう。

VOL.60

国民総生産 GNPから GNHへ 国民総幸福

あれは確か、まだ、私が小学校の低学年の頃だったと思うが、トラックで、リンゴ売りが来ると、米を持って行って、米とリンゴを交換してもらった。

「お金」というものは、本来、モノの価値を測るもので、モノやサービスと交換するための道具に過ぎなかった。

それが、いつのまにか「金さえあれば何でも買える」、「金を沢山持つ人が偉い」、「金を手っ取り早く稼ぐ」と、「お金」が一人歩きし、暴走しはじめると、需要と供給のバランスなど経済原則とは関係なく石油や穀物を急騰させるなどして、私たちの暮しを振り回してきた。

モノへの投資から金融商品への投機へ、「お金」で「お金」を買うようになって、市場はカジノ、博打場と化し、マネーゲームがはじまった。

▼それにしても今回のアメリカ発の金融危機はひどい。

アメリカは、経常赤字を埋め合わせるために、国際基軸通貨である地位を利用して、ドルを刷りまくり、モノやサービスの取引で使う何十倍ものマネーを世界にあふれさせ、米国に世界のマネーが集まってくる仕組みをつくった。

▼震源となった「サブプライムローン」とは、社会的信用度の低い層向けの住宅ローンといわれるが、実態は、預金口座もなくカードも持てない不法入国者とか破産宣告者とか定職も持たないような人たちをも対象に、「住宅価格が上がり続ける」と、ローンを組ませ、家を持たせたものだ。

消費を拡大し続けるための標的にされたもので、まさに、経済的「弱者」を食いものにした「貧困ビジネス」である。

この債権を担保としたサブプライム担保証券は、一般の住宅ローンを担保にした証券よりリスクは高いものの金利自体が高いために利回りが大きく、さらに、その本質が見えないように「金融工学」などを駆使して、複雑にし、格付け機関が最優良のお墨付きを与えた金融商品としたため、世界中が飛びついた。

堺屋太一氏は、これを「ノーベル賞級の詐欺」と呼ぶ。

「米国の腐りきった金融業界は、世界中に何の価値もない証券を売りまくった。人類史上これに匹敵するひどい詐欺があっただろうか。

今回の危機で表に出ているのは金融問題だが、背後には経済以外の要因が横たわっている。社会全体を考えずに自分のことばかり大事にする自己愛、自己陶酔の意識だ。

経済を動かす連中が好き勝手に振る舞う。国家はもう動かない。暴力装置を独占し、社会を秩序立てて、物事を禁止したり許可したりする国家が動かない。金融や経済の危機の背後には、こうした文化の変化がある。」

▼「洗練されたジーンズ姿、人を振り向かせる女子学生の流行のファッション、華麗なテニス・ウェアーの若者が闊歩するキャンパスは、ビラ、ポリ袋、空ビン、等々が散乱し、今や掃きだめと化しているという。

家の周りに、ほうき目を残すことは、かつて貧乏長屋でもみられた風景と想像されるが、この文化の進んだこの国の、しかももっとも偏差値の高いこの最高学府において、みずから掃除しようという若者はいないというのである。公共心、連帯心の欠如は、人間としてもっとも大切な何ものかが奪われた状態であるかもしれない。」

（夢の島化するキャンパス）

今やこのような光景はどこでも見られる。若者に悪意はない。彼等が、意識して選択しているのではない。とすれば、公共心を失い利己主義なのは、日本の社会そのものかもしれない。

▼「実ハ僕ハ生キテイルノガ苦シイノダ」、正岡子規はロンドンにいた親友の夏目漱石に「自我文明」を生きる苦しさを書き送ったようだ。

経済を統御すべき哲学や世界観というものがなくなった世の中、これこそが最大の問題だと気付いていた。

かつて、マックス・ウェーバー（ドイツの経済学者）は、時代が下ったら「精神のない専門人と心情のない享楽人が社会を占める」と予言した。

精神のない専門人とは、人生とは何ぞやと問うたこともない優秀な技術者・専門家たち（経済人）のことであり、心情のない享楽人とは、カネそのもの、あるいはそのカネで買える楽しみが人生の目的となっている人たちのことである。

粋の反対は野暮。成金趣味のような、使う金の量が人の値打ちのように思っているのが野暮。

消費の量が、幸福の尺度ではないことを、人類が共有できる日は来るのか？

▼ヒマラヤの小国、ブータン。

第四代国王は「我が国にとって大切なのはGNP（国民総生産）よりGNH（グロス・ナショナル・ハッピネス、国民総幸福量）だ」と、演説して、先進諸国の度肝を抜いたようだ。

「国として経済基盤は必須であるが、仏教国としては、経済発展が究極目的ではない。「国民総幸福量」とは「人生の充足」ということであり、この充足感を持てることが、人間にとってもっとも大切なことである」。

ブータンには、日本が置き忘れてきたものがあるようだ。

自由放任から規制、「競争」から「共生」へ、経済成長至上主義からの思考転換が求められている。

今後の県立高等学校の目指すべき方向性について

高校問題協議会が答申

坂農・春工・金津商業科・三国家政科を統合か？

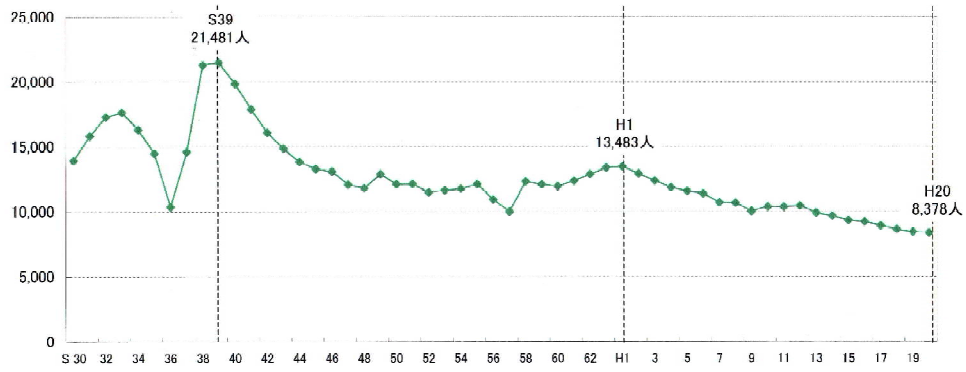
近年の少子化に伴う生徒数の減少など社会的変化に伴う「今後の県立高等学校の目指すべき方向性について」、昨年十二月、福井県教育委員会から諮問を受けた福井県高等学校教育問題協議会（高問協）より、十月十六日、答申がありました。

検討された主なポイントは、①職業系専門学科のあり方、②定時制・通信制過程のあり方、③学校規模・配置のあり方となっています。

本県中学校卒業者数の推移

年	中学校卒業者数	年	中学校卒業者数	年	中学校卒業者数	年	中学校卒業者数	年	中学校卒業者数	年	中学校卒業者数
S 30	13,932	40	19,855	50	12,098	60	11,954	7	10,696	17	8,925
31	15,837	41	17,891	51	12,134	61	12,374	8	10,664	18	8,640
32	17,295	42	16,096	52	11,478	62	12,900	9	10,027	19	8,448
33	17,644	43	14,856	53	11,631	63	13,395	10	10,368	20	8,378
34	16,323	44	13,820	54	11,762	H 1	13,483	11	10,354		
35	14,480	45	13,294	55	12,121	2	12,946	12	10,434		
36	10,348	46	13,108	56	10,908	3	12,385	13	9,911		
37	14,606	47	12,077	57	10,009	4	11,857	14	9,683		
38	21,298	48	11,804	58	12,318	5	11,594	15	9,329		
39	21,481	49	12,902	59	12,083	6	11,385	16	9,224		

※　卒業者数は、毎年3月現在。



▽職業系専門学科のあり方

▼職業系専門高校の拠点校として、農業教育、工業教育、商業教育の拠点校を県内に一校設置すること。

▼従来の枠を越えて幅広い分野の学習を行なう「総合産業高校」を設置すること。

▼普通科と併設する職業系専門学科の配置等の見直し検討。

▼本県の特色（ものづくり、食育、環境・エネルギー）を生かした新しい学科の設置。

▼産業界のニーズに応じた学科の定員割合の見直しが必要。

▽定時制・通信制過程のあり方

▼交代制の昼間二部制を時間帯を固定した昼間制に移行。夜間制については可能な限り昼間に移行する。

▼生徒が自分のペースで学習できるよう、すべての定時制課程において、単位制への移行を検討する。二学期制を導入する。

▽学校規模・配置のあり方

本県の全日制県立高等学校の配置体制は、昭和62年の武生東高等学校の開学・平成3年度の三国高校川西分校の廃止以降、30校（本校29校・分校1校）体制が現在まで継続されていますが、この間、中学校卒業者数は、平成元年3月の一三、四八三人をピークとして、平成20年3月には八、三七八人まで減少し、ピーク時の約38％の減となりました。

今後も、少子化の進展に伴い、中学校卒業者数は減少を続け、平成34年度には七、二〇八人になり、ピーク時より約47％減少する見込みとなっています。

これまで、本県においては、こうした生徒数の減少に対して、学校の大幅な再編整備は行わず、1学級当たりの定員数や1学年当たりの学級数を減らすことで対応してきました。

平成10年度の平均定員数は三九・七人、平均学級数は六・四学級でしたが、平成20年度には三五・五人、五・七学級となっています。

今後の生徒数の急激な減少に伴う学校規模の適正化と学校の配置の検討が必要となります。

▼一学級当たりの生徒数を36人程度とする。職業系などは柔軟な対応が求められるが30人程度は確保する。

▼一学年当たりの学級数は、少なくとも5～6学級程度の学校規模を確保する。

▽各地区における配置

▼（福井・坂井地区）平成30年度以降に生徒数が急激に減少するため、それを見据えた学校の配置をする。

▼（奥越地区）学校の小規模化が進んでおり、早急に配置を検討。

▼（丹南地区）平成30～31年に生徒数が一旦増加、それ以降の見直し。

▼（嶺南地区）平成27年度以降に生徒数が急激に減少するため、それを見据えた対応。

答申から読み取れるもの

学校の適正規模から見ると現在、各学年三学級の勝山南、小浜水産、坂井農業、一学級の武生池田分校の統廃合が、まず、考えられます。

職業系では、拠点校と総合産業高校に分類されますが、総合産業高校は、農業・水産系、工業系、商業系、家庭・福祉系といった複数の専門学科を配置、生徒が特定の学科に所属しながら、一定の範囲内で他の専門学科も選択できる学校となります。

福井・坂井地区を考えた場合、三国の家庭科、金津の商業科、春江工業と坂井農業の全学科が、総合産業高校として、再編することが考えられます。

いずれにしろ、現体制では、少子化と時代の変化に対応していけないと言うことであり、奥越地区を手始めに全県的な県立高校再編に向けて、動き出すということです。

学校に関する事柄は、地域の個別事情なども含め、悩ましい問題もありますが、生徒本位で考え、今後、十分な協議の上、妥当な結論を導いて行きたいと思います。

環境基本計画」、観光推進計画」、農業・農村再生戦略」、地域自立型の包括政策を

現在、福井県は、「環境基本計画」、「観光推進計画」、「農業・農村再生戦略」の3つの計画を策定中です。

作成後に配布されただけだった従来の姿勢を改め、その中間とりまとめ段階で、県議会の意見を反映するための説明会が行なわれるようになったことは、この間の議会改革の成果といえます。

個別計画における内容はともかく、縦割りで計画を見ると福祉環境部、産業労働部、農林水産部に属するものです。

これら計画をバラバラに策定することは可能ですが、目的が計画を作成することにあるならともかく、ビジネスとしての産業を成り立たせ、産業活性化、ふるさとづくりにあるとすれば、総合的な地域戦略を考える必要があります。

環境基本計画については、様々な問題が羅列されていますが、本県の環境がどういうレベルを目指し、何を優先して取り組んでいくのかというビジョンと戦略が、十分に展開されていません。

観光推進計画については、これまでの施策が十分に総括されていません。そのため、今後の方針について、新しい切り口、総合的な視点による、大胆な提案が見えません。

農業・農村再生戦略については、「なぜ、できなかったのか」という総括視点を切り口として展開されていることは画期的であり、率直に評価するものです。

しかし、農業だけの視点ではビジネスにつながっていかない。地産地消と食育を結んだ教育、観光、環境、健康・福祉、林業、未利用有機資源、自然エネルギーなど総合的に結びつけることにより農林水産業がビジネスとして成り立っていける状況を作るべきです。

世界一の太陽光発電パネルメーカー
ドイツQセルズ工場を視察

ふるさと再生に政策誘導を

▼自然エネルギーを視察するため、ヨーロッパ（デンマーク、スウェーデン、ドイツ）へ行って来ましたが、これらの国々では、環境を重視した政策を推進しているため、結果として、自然エネルギーをはじめ、地域自給型、地産地消スタイルとなります。

従って、教育そのものも、「あなたはどう考えるのか」という思考を重視しているように思います。

それは、民主主義の熟度と言ってよいと思いますが、哲学を植え付け、きちんとした「批判力」を醸成しているように思えます。

ドイツの高速道路を走ると集落ごとの風力発電があちこち見える

広大な敷地一面の太陽光パネル

環境教育を重視することは、必然的に、地域の歴史や風土に根ざして身近な環境問題を考え、行動することになりますから、自分の住んでいる「ふるさと」を大切にしていくことにつながります。

ドイツでは、政策的に再生可能エネルギーの買い取り保障政策を進められました。

1991年には電力買取法を制定、2000年には再生可能エネルギー法を制定し、電力会社が20年間再生エネルギーを買い取ることを義務化しました。

その結果、Qセルズという世界一の太陽光発電パネルメーカーが生まれています。

また、ドイツでは、省エネルギー法により1平方メートル当たりの年間熱消費量が75キロワットアワー以下という厳しい建築構造基準が設けられています。1970年以前に以前に建てられた建物と新築を比較すると、年間暖房費に15万から20万円の差が生じる。近年、断熱に対する技術の進歩があり、省エネリフォームをすると7～10年で投資額が回収できる。その結果、ドイツでは省エネリフォームが盛んに行われ、ビジネスが生まれている。

このように再生可能エネルギーを推進することにより、大企業の独占を打破し、地方におけるエネルギーの地産地消を実現した。なおかつ、省エネリフォーム市場などのビジネスが派生し、地方で新たな雇用を生み出した。そこで、日本においても、ドイツ並みの再生可能エネルギーの買い取り制度の導入について、国に積極的に働きかける必要がある。（東京都など首都圏八都県市は、すでにそうした要望も提出している。）

県民、企業が一体となった環境推進体制づくり、環境に関するプロフェッショナルな人材の育成をはかること。そして、環境をキーワードに、住宅対策として、太陽光発電設置や壁・屋根の断熱構造強化など、県独自の省エネ指針を策定し、合わせて優遇制度を設け省エネリフォームを誘導すべきである。

自然エネルギーなど環境ビジネスを活かしたふるさと再生をめざすべきだ。

農業再生がポスト工業社会

▼ヨーロッパでは、その地域の文化や生活様式を復活させることで、持続可能な都市（サスティナブル・シティ）を維持しています。

グローバリズムは、二極化、「格差」をもたらしています。

世界的に見れば、「アメリカ一人勝ち」という状況があります。

国内的には、「東京一極集中、東京一人勝ち」という状況が生まれています。

最近の特徴は、工場が国外に出ていって、国内には知識を使う管理・企画部門、サービス産業が増え、地方の企業の本社機能が東京に移っています。その結果、社員が地方から東京へ動いているということです。

地域間格差には、所得格差、サービス格差がありますが、なぜ、格差は広がったのでしょうか。

▼トリクルダウン効果とファウンテン効果

豊かな地域がより豊かになれば、そのおこぼれが他の地域に落ちてくる、金持ちがより金持ちになれば貧乏人にも回ってくるというのが、トリクルダウン効果といわれるものです。

その逆に、大地から泉がわきでるような、下が豊かになることによって上も豊かになるというのがファウンテン効果といわれるものです。

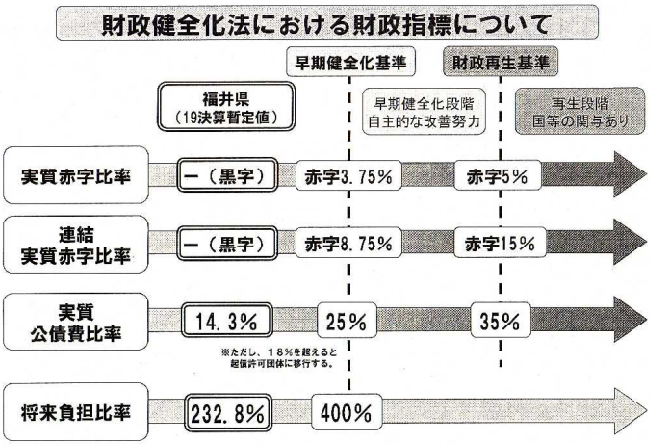
最近は、日本型経営も大きく様変わりしてきており、企業が利益を上げても、労働者の給料にはね返らない様相となっています。トリクルダウン効果が期待できない状況となっているということです。

「地域の発展」という言葉は日常的に使われていますが、「工業社会」から「知識社会」へと転換した中で、時代と共に、その内容は変化せざるをえませんし、何が本当の「発展」なのかということも吟味しなければなりません。

最適に地域の自然を活かしながら生活できることが最も豊かなことであり、地域内に経済循環を守るシステムを準備していく必要があります。

ポスト工業社会は、まさに「ふるさと再生」、「農業再生」といえましょう。

主要プロジェクトと財政指標を見る



主要プロジェクト事業費見込み

	総事業費	完成見込	今後の事業費見込（A）	（A）のうち県負担見込額	起債（通常債）
北陸新幹線	5,280億円	未定	5,280億円	1,760億円	1,584億円
中部縦貫自動車道（永平寺大野道路）	1,292億円	未定	614億円	154億円	69億円
足羽川ダム	960億円	H38	842億円	211億円	190億円
九頭竜パイプライン	1,133億円	H27	611億円	117億円	105億円
合計	8,665億円		7,347億円	2,242億円	1,948億円

主要プロジェクト後の財政は綱渡り

今年度より、地方財政健全化法に基づく四つの健全化判断比率を議会に報告し、県民に公表することが義務付けられました。

夕張市の財政破綻に見られるように、財政状況を首長と担当者しか知らないような状態にあることが、一番の問題です。

財政健全化にとって何が重要かといえば、財政状況の分かりやすい公表や今後の見通しに関する具体的な説明です。それが、健全化を促進させる最も有効な方法です。

福井県は、中長期計画、及びそれに基づく中長期財政計画を作成していないため、現在、予定されている主要な事業と事業費の見込み額を調べてみました。

そして、それらの事業を実施した場合、起債（借金）をしますので、財政健全法における財政指標の一つである実質公債費比率がどの程度の数字になるのか、これらの主要プロジェクトを実施しても大丈夫なのか検証してみました。

上左図は、福井県の決算数値と財政健全化の財政指標です。

これを見てみますと、まず、四指標とも正常な範囲で、今のところ健全な決算数値といえます。

実質公債費比率に注目してください。これは、簡単に言えば、財政規模に占める借金の返済金額の割合を表す指標です。

現在、福井県には約八千億円の県債（借金）残高があります。これが財政規模の14・3％になっています。

この指標で、目の前の黄色信号ともいえる注意信号は、18％で、これを超えると、起債許可団体となって、起債（借金）する場合、国の許可が必要となります。

単純に、返済した分だけ借り入れるとなれば、債務残高が18％に到達するのは、18％マイナス14・3％で、残り3・7％となります。

単純に計算すれば、債務残高が18％となる金額は、約一兆円です。

そうすると、注意信号である起債許可団体になるまで、あとどれだけ借金（起債）が出来るのかといえば、現在の残高約八千億円を引くと残りは、約二千億円となります。

次に主要事業プロジェクトの事業費とその資金内訳を見てみましょう。

右上表は、主な事業ごとに、それらの概算見込み額を示したものです。

事業費総額は、八千六百六十五億円、今後、必要となる事業費は、七千三百四十七億円、そのうち県負担見込み額は、二千二百四十二億円、そのうち起債（借金）は、千九百四十八億円となっています。

黄色信号まで、あと二千億円ですから、予定している主要プロジェクトが完了すると、実質公債費比率は、限りなく18％に近いギリギリセーフの状況となります。

もちろん、これは、主要プロジェクトが予定通りの見込み額で完成すればの話です。

九頭竜川パイプライン事業のような、事業費が2倍にも膨れ上がるようなことはないにしても、それを上回れば、一気に最初のイエローカードともいえる起債許可団体となります。

今回取り上げた、主要プロジェクトは、事業費が千億円規模以上のものです。

新幹線が走れば、ＪＲローカル線確保のための負担も生じてきますし、国体を開催することになると、二百～三百億円必要なのではないか、などともいわれていますが、そうした規模の事業もいくつか見受けられます。

もちろん、道路や橋の整備など入れれば、大変な金額に膨れ上がるでしょう。

景気悪化に伴う税収をはじめとする収入減も予測され、今後の財政見通しに明るい展望はありません。

今年は、台風が一つも来ない「異常」な年でしたが、災害の増加なども心配です。

いずれにしろ、大規模プロジェクトが実施されれば、その後は、極めて硬直的な財政運営を強いられます。

どういう福井県をめざすのか、ビジョンと中長期の財政計画をしっかり打ち立て、ムダを省き、限りある予算を意義あるものに上手に使わなければなりません。

新緑の眼

2兆円あれば新幹線が全線開通する

あなたは定額給付金を何に使いますか

◆◆ 米百俵のおはなし ◆◆

戊辰戦争後、焼土となった長岡の人々は、食べ物もなく極度の貧窮の中にあった。

その状況を見かねて明治三年、三根山藩(新潟県巻町)から、お見舞いとして米百俵が届けられた。

一日に三度のおかゆも満足に食べられずにいた藩士やその家族たちは、これで一息つけると喜んだ。食べるものにも事欠く藩士たちにとっては、のどから手が出るような米であった。

しかし、その時の長岡藩大参事・小林虎三郎は、「食えないからこそ教育をせねばならない」と、その米を藩士に分配せずに換金し、学校設立のための資金とした。

これが後に多くの人材を次々に輩出することとなる、国漢学校のはじまりとなった。

この故事をもとに、山本有三が戯曲として書き下ろしたのが、「米百俵」。

虎三郎は「早く、米を分けろ」といきり立つ藩士たちに向かってこう語りかける。

「この米を、一日か二日で食いつぶしてあとに何が残るのだ。国がおこるのも、ほろびるのも、まちが栄えるのも、衰えるのも、ことごとく人にある。……この百俵の米をもとにして、学校をたてたいのだ。

この百俵は、今でこそただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか、はかりしれないものがある。いや、米だわらなどでは、見つもれない尊いものになるのだ。

その日ぐらしでは、長岡は立ちあがれないぞ。あたらしい日本はうまれないぞ。……」

▼首相は、「百年に一度の米国発暴風雨」と米国発の金融危機に対する認識を強調されましたが、その国内向けの追加経済対策の目玉が、一人当たり一律一万二千円を支給する総額二兆円の定額給付金だと聞いて、思い出したのが、前記した「米百俵」のお話です。

▼景気回復のために、現金を給付して、消費を拡大するというのが、政策の狙いだというが、財布に一万二千円入るだけで、どんな消費拡大が期待されるのだろうか、所得制限の判断だけでなく、いっそのこと市町村単位で何に使うかを決めてもらうのもよいのではないか。

かつて、竹下登内閣が「ふるさと創生一億円事業」を行った。

全国の市区町村に対し一律一億円を交付したもので、その使い道について国は関与しない。正式名称は「自ら考え自ら行う地域づくり事業」。

一億円全額を投じて宝くじを購入したり、温泉を引こうとボーリング調査を行ったものの結局温泉は出ず、一億円を無にしてしまったという事例も出て、無駄遣いの典型ともいわれたが、創意工夫し地域の振興を図りつつ、ふるさとづくりを推進する動きが各地で試みられた。

都道府県単位で分配するとなればどうか。福井県の人口82万人に単純に一万二千円をかけると、それだけでも百億円となる。

百億円あれば、私なら…。

▼2兆円という金額は、どういう金額かといえば、国の現在ある計画中の整備新幹線全線の総額が2兆数千億円ということですから、ほぼ地元負担なしの国費で、整備されてしまう金額だということです。

「定額給付金政策」と、「米百俵政策」はまったく逆の政策。

腹をすかせて、いきり立つ人々から憎まれても、中長期の視点で有効なお金の使い方を提起し、実行し、成果を収めた指導者、小林虎三郎。

もちろん、昔ほど単純な時代ではない。殿様の時代ではなく「民主主義」の時代である。

目先の対策もきちんとやらなければならない。メニューも一つだけではない。

しかし、それがスタンドの観客席に手を振り、笑顔を振りまく「スタンドプレー」になると原則を踏み外し、目的を見失い、効果のない費用となりかねない。

インドの指導者、マハトラ・ガンジーが言った「現在の七つの罪」とは、まさに現在のことではないかと錯覚します。

原則なき政治
道徳なき商業
労働なき富
人格なき教育
人間性なき科学
良心なき快楽
犠牲なき信仰

なぜ一本化したのですか

さらなる進化をめざして

自民党新政会と県議会自民党と一志会のうちの自民党所属議員27名で、自民党県政会を結成しました。

「なぜ、一本化したのですか」と問われれば、衆議院議員選挙をはじめ様々な要因はあるのですが、基本的なことを言えば、地方議会は国会と違って、自民党対民主党で、勝った方が総理大臣になって、行政を動かす議院内閣制ではないということです。

地方政治は、アメリカの大統領制のようなものですから、首長対議会という構図(両者が直接選挙で選ばれる二元代表制)になります。

とはいえ、いくら議会が存在していても、勉強していなければ、役人の筋書き通りに動いているだけで、監視能力も持たず、議会としての機能を果たさず、単なる「口利き」だけの機関に成り下がってしまいます。

その面で、いくつかの会派が、技を磨き、競い合って能力を開発し、全体が一つになって議会力を発揮することは望ましいことです。

しかしながら、政策的なものはともかく、人事的な問題が生じるとどうしても数の綱引きをすることになり、対立感情が生じてきます。

それを煽動する輩も多くなってくると手を付けられなくなります。そうなると、会派間で足を引っ張ることになり、知事に対する力のベクトルが相殺されてしまいます。

議会内部の会派間で争って、知事、行政に対して、力の矢印が向かわないようでは本末転倒となります。

「政治家に離合集散はつきもの」と言ってしまえば、それまでですが、「進化」していく過程では、くぐらなければならないこともあります。

「一本化しない方が活発で良かった」という声や「議会改革派が吸収されて、元の木阿弥に戻ってしまうのでは」と心配する声もあります。

しかし、この間、築いてきた活動スタイルや信頼は大きく、時計の針が逆戻りするようなことはありません。

議会全体がスクラムを組んで、議会改革はもとより、県政の充実をめざしていきます。

斉藤新緑後援会「緑風会」

会長　大嶋一英

「ほっとらいん」が、六十号を刊行するに当たり一言ご挨拶申し上げます。

私が、斉藤新緑後援会「緑風会」の会長を引き受けましてから、早くも十年の年月が、経過してしまいました。この間に県議選を三回戦って参りましたが、皆様の温かいご支援により、当選を重ねることが出来ましたこと、厚く御礼申し上げます。

思えば丁度十年前、当時、三国町議会議長の中野さんと区長連合会会長の大井さんが、突然、私の元へ来られ「三国から県会議員を出したい。候補者は斉藤新緑町議で、先生には後援会長をお願いしたいので是非引き受けて欲しい。」とのお話でした。私は「その任にはあらず。」とお断り申し上げましたが「三国のために是非」と何度もご足労を煩わす事態となり「どこまでお役に立てるか自信はありませんが、三国のために些少なりともお役に立つならば…」と、お引き受けした次第であります。

新人として立候補した最初の選挙において、私は有権者の皆様に次のように申し上げました。

「斉藤新緑は、まだまだ若輩者で未熟でありますが、政治家としての資質には素晴らしい物を持っています。私は後援会長として、この粗削りな素材を育ててみたいと思います。」こんな挨拶を申し上げた事も昨日のように思い出されます。

議員はこの後も順調に当選を重ねた結果、県議生活も九年強となり、この間、自民党県議として着実に実績を重ねて参りました。

自民党新政会政調会長、県議会副議長、自民党新政会幹事長、そして現在は自民党県政会幹事長と要職を歴任し、そのつど政治家としての力量を遺憾無く発揮し、特に昨年五月、十二名の少数会派となった新政会の幹事長として会派を切り盛りし、自身が中心となって「福井県議会議員の政治倫理条例」を成立させた事は、議会内で自身の政治力を大いに高める結果になり、大きな収穫でありました。

又、福井県及び地元坂井市への貢献も大きく、数えるだけでも、京福三国線の存続、福井港の開港、小松空港における小松～上海便の定期便開設、北陸新幹線問題に対する対応などの問題でも確実に成果を実らせ、政策に強い政治家としての評価を不動のものにしています。

私が耳にする議会人としての評価は非常に高く、「三国町の斉藤新緑」から「福井県の斉藤新緑」と評されるようになり、県議会では無くてはならない大きな存在感のある政治家となっています。この様に議員自身の成長には目を見張る物があり、大きく育っている事は実に微笑ましく嬉しい限りであります。

今後は初心を忘れず、政治に対する情熱、善悪を見分ける良心、そして結果に対する責任を充分に弁えて、更に大きな政治家に飛躍して欲しいと願っています。

そして、議員自身はこれらの期待に背かない力量を持ち合わせていると、私は確信していますが、どうか皆様にも議員の今後の活躍を期待していただき、それと同時にこれからも叱咤激励をお願いし、温かい目で議員を育てていただきたいと思っております。

簡単ではありますが、紙面をお借りして皆様のご厚情に感謝申し上げると共に、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

又、この「ほっとらいん」が末永く続き、皆様と議員との架け橋となって意思の疎通が行われる事を願って止みません。

ほっとらいん60号を記念して

節目の号には、いつも文化人や国会議員などゲストとして紙面に登場していただきましたが、今回は60号、還暦号ということで、これまで、一度も登場したことのない後援会長、同僚の議員(各会派の執行部)のメンバーなど身近な人に一言メッセージをいただきました。

福井県議会　議長
山岸　猛夫

会報60号の発刊おめでとうございます。

全国広しといえどもこれだけ読みごたえのある機関紙を出している議員はめったにいないと思います。

県議会議員になられる以前から3ヶ月に1回の発刊はされていたとお伺いしております。

以来、常に時代の先を読み住民の目線でわかりやすく時事問題を解説し、また、斎藤議員の高い識見が述べられており心から敬意を表します。

斎藤議員のホームページいつも興味深く拝見しております。これからも時代の流れを鋭い視線で解説し、県民の皆様との「ホットライン」として、今まで以上に充実した機関紙としていただきますよう大いに期待申しあげます。

わが会派、最大会派の幹事長として、ご苦労をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

結びに斉藤議員の益々のご活躍を祈念申しあげましてご挨拶といたします。

会報六十号発行によせて

福井県議会　副議長
一瀬　明宏

日頃から斉藤先生には、県議会の運営を力強く支えていただいていることに対し心から感謝しております。

さて、このたびの「会報六十号発行」おめでとうございます。長年のご努力に対し、敬意を表します。

九月には、保守系会派が一つになり、福井県議会の最大会派として、ますます県政発展の為に議員一同一丸となって、力を注いでいきたいと思っております。

斉藤先生には、その自民党県政会の幹事長として、会派のまとめ役として御活躍いただいております。

県政は今、困難な課題が山積しており、私ども県議会議員の先頭に立って、先生の強力なお力添えが必要不可欠であります。

斉藤先生といえば、県政にかける意気込みは、聞く者を圧倒する迫力があります。会報も拝見させていただいておりますが、その知識にはいつも驚かされております。毎回楽しみにしております。

気さくで親しみやすいお人柄で、私は、これが皆様から信頼され、ご支援いただいている大きな理由ではないかと考えております。

今後、斉藤先生には、福井県を背負っていく政治家として、さらに羽ばたいていただくことを念願しています。

私と斉藤幹事長

自民党県政会　会長　田中　敏幸

幹事長は、青年団以来の仲間で、私が鯖江市議を四期、幹事長は三国町議を二期経験して、県議会に同期に入りました。

自民党新政会～自民党県政会と会長、幹事長というコンビを組ませてもらっています。

この度は、機関紙発行60号だと聞きました。

「機関紙は青年団の顔」などと昔よく言っていましたが、よくまあこれだけの新聞を継続して発行しているものだと感心します。労力もさることながら、経費も大変でしょう。並大抵の精神力ではできません。

人は窮地に立たされたときに、本性が見えるといわれますが、会派の分裂劇があった、まさに「乱世」の時に、幹事長は、しっかりと方針を示し、全体をまとめ、議会改革や政策条例を実現させるなど見事なリーダーシップを発揮して、ピンチをチャンスに変えてくれました。

それらは、地方議会人として、常に勉強し考えているからできることであり、その器量がなければできません。

その実力を培っているのが、この機関紙の発行ではないかと思います。

今回の会派の一本化にあたっても大変な苦労をかけましたが、これからも頼りにしています。１００号目指して頑張って下さい。

ほっとらいん60号発刊おめでとうございます。

自民党県政会　副会長（前議長）

石川　与三吉

議会においては、活発な発言、発展的な提言、そして、実行・実現に常に前向きに、議員の先頭に立って実施され、常に注目されておられます。大変心強い議員として敬服いたしております。

特に、平成13年度第324回定例会で、涙を流しながら訴えた電車存続の一般質問が、私には強く印象に残っています。

あれが、廃線に傾いていた多くの議員の心を動かし、その後の新会社「えちぜん鉄道」を設立して、三国まで電車を運行させるという奇跡を呼び起こした決定的な局面だったように思います。

さらに、平成17年４月に福井港を関税法上の開港指定を受け、国際港としたことも貴議員の大きな活躍が実を結んだものです。

外航貨物船の数も、平成15年46隻、平成16年78隻、平成17年101隻、平成18年192隻、平成19年208隻と増加しており、この功績は称えられるべきものです。

若手議員として、これからも福井県発展のために、一層のご尽力を賜りますよう、同議員としてお祈り申し上げます。

「ほっとらいん」発行60号、頑張っていますね、おめでとう。

県民連合　会長

野田　富久

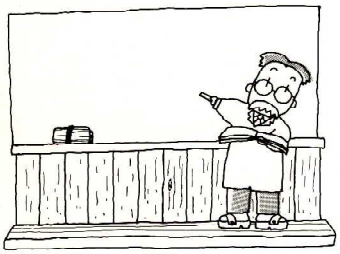
「継続は力なり」とは言われますが、この議会報告紙が議員としての一貫した政治姿勢を発信し、新緑氏自身も変わりない信念の拠り所としているものと思う。

新緑氏とは、足かけ30年、旧三国町の町会議員になる前からの付き合いであるが、氏は時に言いたいことを言い、なすべき調査や研究はトコトン行い、政策提言を行っている。その実現方でも、「ツボ」を心得ており、その手法と対応はなかなかのもので、私たち議会人を唸らすが、同僚の嫉妬ややっかみを起こさすこともある。

この報告紙は私の支持者にも渡っているが、開心持って読んでおり、「野田さんも、新緑さんのような議会紙を出しなさいよ。」と、苦言を私に向けてくる。

確かに、この議会紙は通り一遍の県政報告でなく、いつもコラムの中に、裏付けと氏の主張があり、人を納得させる。氏の政治信念と感性が、読む者を得心させ、同じ感覚で政治を体現させる「代物」だ。

友人であり、先輩として、氏の今後を期待し、応援していきたい。



議会一の読書家、政策通、決断力と実行力

県民連合　幹事長

山本　正雄

私は時々斉藤新緑ネットワーク会報「ほっとらいん」を読ませていただいているが、あちこちに多い読書量とそれを駆使した政治家としての批判や提言は鋭く、示唆に富むものが多いことにいつも感心しています。

県政の重要課題の厳しい現状把握についての調査・勉強も議会随一ですが、政治評論集は勿論、「論語」など古典、坂本龍馬など歴史小説、地元出身荒川洋治を始めとした詩集、エッセイなどあらゆる分野をこなします。

これだけの読書のきっかけは何かと伺いますと「福商時代３年生前半に早く就職が決まり、ゆとりの時間ができたから」とのこと。読書の習慣が身につくと、元々スポーツマンの新緑議員が、ここまで「教養深い、鋭い政治家」に育つという見本だと思います。

読書の習慣は一生の大きな財産となったのです。私も教員時代に読書教育に力を入れてきましたが、斉藤新緑議員はその一つの典型だと思います。学校や家庭でなんとしても、落ち着いて読書をする、読み切る大切さを身につけて欲しいものです。

さて、次に「県議会改革」について、大きな力を発揮したことについては触れないわけにはいきません。

私は30年余りの教員生活の後、福井県の教育・学力を充実させ、青少年の夢や希望を実現させるために、先生方や教育関係者、働く仲間の支援により県議会に出させていただいて、斉藤議員と同じ３期目です。

私は県民連合で、会派は違いますが、斉藤議員とともに県民視線で議会改革、知事部局に対して対抗できる議会の強化策に取り組んで来ました。

まず、最初に取り組んだのが、談合事件が県内外で頻発したので、政治家・県会議員も襟を正すために提案した「福井県議会政治倫理条例」の制定でした。その後も、新政会、県民連合、一志会など三会派で「政策合同研究会」をつくり議会改革に取り組んできました。斉藤さんが中心に作り上げた福井県議会初の政策条例となった「地産地消推進条例」が成立し、福井県議会の歴史に残る議会改革に成功したのです。

今現在も、産業版の地産地消ともいえる地元中小企業の育成に関する条例や私ども県民連合が提案した「森づくり条例」など制定に向けて具体化しています。

これら成功した議会改革の背後には斉藤さんの会派調整、知事部局対策など並々ならぬ情熱と決断力、戦略と戦術があったからです。

また、私は新田塚に住んでいて芦原温泉での会合にはいつも便利な電車を使いますが、芦原湯の町まで電車が走っているのは、斉藤さんのおかげだと感謝しています。

本邦初公開のことも書きましたが、県議会改革のため今後とも協力・連携して頑張りましょう。

自民党県政会　政調会長
中川　平一

新緑さんとは、同期で、県会議員として早十年が過ぎようとしています。

新人が議会で発言するのは、緊張するものですが、彼は初めから堂々たるものでした。

彼はまた勉強家でもあり、読書量も多く、しかも幅広く、それ故、質問内容は十分に説得力もあり、迫力もあります。

彼の提言により、多くのことが実現しています。

例えば、三国ボートの係留場の建設は、予算特別委員会での発言によるもの、又、議会では、特別委員会のあり方やあるいは会派での政務調査会のあり方が改革されたことも彼の提言によるものです。

県議には、いろいろなタイプがありますが、彼は常に問題意識を持ち、県政のあるべき姿を追求し、意欲満々、積極型。

そのもてる力を十分に発揮された十年であったと私は評価しています。

見た目同様、猪突猛進。少々強引ながら、力強く、泥くさく、若々しく荒削りなところが彼の魅力です。

自民党県政会
政調副会長　笹岡一彦

この度は、斉藤先生のホットライン60号記念発行、誠におめでとうございます。

それは18年間にも及ぶ議員活動の軌跡であり、限りなく高まりゆく志の道標であり、徹底した思索と行動によって搾り出された政治的作品であると存じます。

また、文字通り支持者とのホットラインであるだけでなく、確固たる政治信条を支えてきたライフラインであり、将来の福井県政を導くガイドラインでもあると存じます。

今後も県政改革のエースとして、斉藤先生の斬新かつ重厚な活動記録が益々号を重ねられんことを心よりお祈り申し上げております。

自民党県政会　財政局長
松井　拓夫

私は勝山市選出の二期目の県議会議員です。

斉藤議員とは固い信念で結びあった揺るがぬ男同士のつき合いをしている仲であります。

彼は、各議員からも『新緑さん』とか『しんちゃん』という愛称で親しまれている、きさくで豪快な人物です。

この『県議会報告』さいとう新緑ネットワーク会報を読ませていただきましたが、彼の文にも好きな言葉や詩にも、まさしく政治家になるべくして生まれてきたのだなぁと思わせる熱意と信念があふれています。

その『しんちゃん』は議員38名中、27名が所属する最大会派・自民党県政会の要である幹事長として、会派の取りまとめ、他会派との調整等、精力的に手腕を振るっておられます。福井県が元気になる仕組みをつくる為、議会と理事者が共に知恵を出し合わなければなりません。

『しんちゃん』はこのような問題を政策的に議論しながら、時には声を大にして、また笑顔で対応したりしています。

ふるさと福井県をこよなく愛する『しんちゃん』。

理想と希望を持ち、我がふるさと福井県を自分の手で守ろうという、若者の意欲を掻き立てるような政策づくりに共に頑張りましょう。

県民連合　政調会長
鈴木宏治

９日間、ヨーロッパにご一緒しました。斉藤さんはすごかったですね。昼はよく本を読む、夜はよく酒を飲む。一番若い私が時差ボケでぐったりしているのに、斉藤さんはパワー全開。

え？また斉藤さんとは飲み会？マジっすか…。

自民党県政会　副財政局長
大森　哲男

斉藤新緑氏と初めてお会いしたのは、新緑さんが、県会議員一期目の京福線の存続、再開運動の時だったと思います。

私は、まだ、市議でもなく、まちづくりのＮＰＯの代表として、京福線の存続運動に参加していました。福井市中央公園での演説はすばらしくて、今も記憶に残っています。

これからは、同じ会派で、また、同士として福井県の発展の為に仕事ができます。

今後とも宜しくお願いします。

一志会　政調会長
西本　正俊

斉藤先生の「ほっとらいん」が還暦にあたる60号を数えられましたこと、まずもってお慶び申し上げます。

私が申し上げるまでもなく、「ほっとらいん」はその時々の県政の課題についてずばり直言されております。いまや大衆迎合化する政治家が散見されるなか、政治家にとり極めて大切なことだと痛感しています。

私は昨年の４月県議会に初当選させていただきましたが、斎藤先生を近くでお見受けし、とんでもない豪快な政治家がいるものだと驚きを隠せませんでした。

福井県議会において、次代の方向を示す重鎮として、今後ますますのご活躍をここ ろよりご祈念申し上げます。

日々是修行

毎週土曜日に朝日新聞に連載されている「日々是修行」を執筆する仏教学者、佐々木閑花園大学教授は、私の中学校時代の同級生です。

何気なく開いた朝刊に「佐々木閑」の名前を見て、驚きと嬉しさと懐かしさで、無性に会いたくなって、実家の黒目の称名寺のご母堂様に連絡先を尋ね、京都に会いに行きました。

随分前に読んだ本で、確か「仏教からの経済学」(井上信一著)というのがありました。内容的には、「分け合えば余る。奪い合えば足りぬ」という仏教本来の精神を基本に、肥大化する欲望と幸福との関係(欲望が大きくなれば充足率が低くなるので不幸になる)や仏=自然と置き換えれば、自然を破壊するものについては税を高くとる環境税のようなものについて書かれてあったと思います。

今日、地球温暖化問題、アメリカ発の世界中を巻き込んだ詐欺事件のような金融危機、グローバル資本主義によって、国固有の社会的価値観が失われるといった問題など今日の社会について、あるべき政治について仏教学者としての閑君のご高説をお聞きしたいと思いました。

私と閑君は、三国中学一年一組、野尻(現、岡崎)学級で、出席番号は確か7番8番だったように思います。いきなり閑君が「新緑という名を初めて聞いたとき、それは人間の名前なのか、植物の名前ではないかと思った」というので、急に入学式の日、教室で先生が名前を呼んで出席をとるのに、変わった名前でみんなに笑われるのではないかとドキドキしたことを思い出しました。(しかし、その時は、私の前に、小島浩之助君とか米谷善三郎君がいてくれて、先に笑いを取ってくれたので、助かりました。)

閑君は、藤島高~京都大学というエリートコースで、家が寺院だから、仏教学者という道をストレートに選んだのだろうと思っていたら、紆余曲折もあったようで、家族で渡米していたときの話など苦労話も聞かせてもらいました。

そのせいか、仏教学者だからか学者っぽくなくて、私の質問に「そんなもん、仏教学者という以前に一市民として腹が立っている」という話しぶりでした。

「すべては生まれ消えていく」という今週(十一月一日号)の日日是修行も面白く拝読しましたが、会話の中には、そうした話題もいっぱいあったはずで、ほっとらいん60号記念に対談形式で掲載する予定だったのですが、担当者のはずの同伴した奥様も閑君も私も楽しくて忘れてしまいましたので、こういう感じの記事になりました。

それでも、朝日新聞の記者から、「ふざけないで真面目に書いてくれ」といわれて、「いつも面白い部分がボツになる」とぼやいておられましたので、今度は、そのボツになった楽しい記事を送ってもらおうと思います。

「五十を過ぎたら、こういう時間が持てるんだぞ」と若かった頃の自分に対して優越感を感じた時間でした。

かぎりある命のひまや秋のくれ　(蕪村)

彼一語我一語秋深みかも　(虚子)

佐々木閑　花園大学教授

新緑君との再会

佐々木閑

私の生まれは三国町黒目です。三国の町なかからは四キロほど離れており、今でこそ車であっという間に行き来できますが、小さい頃は車などなく、ゴトゴトとバスに乗って三国駅前まで買い物に行くのも、ちょっとした旅行気分でした。

そんな田舎の小学生が、中学にあがり、コンクリート造りの三国中学へ通うようになった時には、「おおっ、なんとハイカラな世界なんだ」と大いに驚いたものです。

その三国中学で、最初にクラスで見かけたのが斎藤新緑君でした。彼が「さいとう」で私が「ささき」。出席簿の順で机が並んでいたからです。

「斉藤」は普通の名字だからいけれど、その後ろの「新緑」という名前がなんとも奇妙で、とても人の名とは思えず、「紅玉」とか「二十世紀」と同じような、なにか果物か野菜の名前のような感じでした。私自身の「閑」という名前も相当変わっているのですが、自分のことは棚に上げて、「新緑なんて、世の中には変な名前の人がいるもんだ」と感心したのを覚えています。その新緑君、不思議と存在感の強い子で、ものを言うときのはっきりした口調が印象的でした。今思えば、その時すでに、政界に進む資質が現れていたんだなあ、と納得です。

二人の縁は中学時代で一旦切れ、高校卒業後、京都に出た私は、地元の友人と顔を合わせることもほとんどなく、そのまま四十年近くが過ぎました。その間、新緑君は町会議員から県会議員へと政治の道を進み、私はといえば、うろうろしている間に、仏教学者という、なんだか職業のような趣味のような、変な身分に落ち着いたわけです。それが数年前、父親と祖母が続けて亡くなった時、新緑君が、どちらの葬儀にもかけつけてくれて、久々の再会となりました。身内の不幸に駆けつけてくれる、その気持ちがうれしくて、いっぺんに、中学時代の親しさが戻ってきたのです。

人の縁は本当に不思議なもので、四十年間、なんの行き来もなかったのに、会ったとたん、あっというまに元の友達です。お互いそれぞれに人生経験を積み、心の中に、楽しいこと嫌なこと、人の世の裏表をずっしり抱えて言葉を交わせば、自然と話も深みが増して面白く、五十を過ぎて、また良い友人に巡り合ったという感じです。

その新緑君が先日、激務の合間をぬって京都まで会いに来てくれました。飲み屋の座敷で、腰を据えて飲みながら、いろんな話をしました。

中学、高校の同級生と飲む時は、大抵、昔話に花が咲くものですが、この時ばかりは不思議と、昔の話よりも今の話、そして未来の話で盛り上がりました。

新緑君の、政治家としてのエネルギーがそうさせたのでしょう。日本の現状と将来、環境問題への熱い思い、腐敗した官僚制度への怒り、そういった思いを次々と語る姿は、なかなかカッコいいものでした。

なにより驚いたのは、知識量の多さ。世間ではあまり言われていないことですが、政治家にとって一番大切なのは、勉強です。

正しい情報を一杯頭の中に入れておかなければ、最善の判断を下すことなどできるはずがない。当り前のことなのですが、日本ではどうもそれが誤解されているようで、「政治家というのは、貫禄があって、面倒見がよければそれでいい」などと思われているようです。

貫禄も面倒見も大切ですが、政治家にとってなによりも大切なのは、「沢山勉強して、どんな問題にも正しい答えを出せる、すぐれた知力」です。勉強しない人間に、政治を語る資格はありません。

「新緑君はそのことがよく分かっているなあ」と感心しました。政治、経済ばかりでなく、文学や宗教といった、人の内面に関わる分野のこともよく知っていて、酔っ払ってふらふらになったあとは、仏教談義で盛り上がりました。

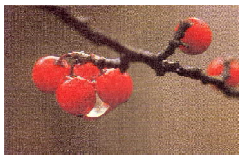
これからの二人の人生、あと何年あるのか知りませんが、ともかく、三国に良い友人がいるという思いはうれしいものです。今度一緒に、インド巡礼の旅なぞ、行けたらと期待しています。

新緑の気ままにトーク

あさきよめ

悔のない一日をおくることも
容易ならざる光栄である。
時間一杯に多くのものを読み、
何かを心に書きつらね、
少しもたるみなくけふを暮さうと、
身がまへてはゐるけれど、
鈍間な生涯がのろのろと、
山また山の彼方に続いてゐる。

山のあなたに幸ひ住むと、
むかしの詩人はうたったけれど、
山の向ふも山ばかりが聳え、
果には波打つ海があるだけだ。
なにごとも為しえなかったごとく、
為しえなかったために、
見極めがつくまで生きねばならない。
街のむかふも街だらけ、
果には山があるだけだ、
幸福なんぞあるかないかも判らないが、
生きて生き抜かなければならないことだけは確かだ。
悔のない生涯をとらへることは
その招来に於ては
容易ならざる光栄である。



室生犀星

秋という季節は、「初めは処女の如く、終りは脱兎の如く駈けぬけて行く」と言うから、やっと秋らしく紅葉になったと思ったら、もう隣に冬がいるということなのだろう。そして、あとわずかで、また一年が終わる。

秋の日の　ヴィオロンの　ためいきの　身にしみて　ひたぶるに　うら悲し。

鐘のおとに　胸ふたぎ　色かへて　涙ぐむ　過ぎし日の　おもひでや。

げにわれは　うらぶれて
こゝかしこ　さだめなく
とび散らふ　落葉かな。

「枯れ葉よ～枯れ葉よ～」、枯葉を歌ったイヴ・モンタンは、まだ生きているのだろうかと、ネットで調べてみたら91年に亡くなっていた。

１９４４年にエディット・ピアフに見出され……。モンタンの浮気がスキャンダルになったことが何度もあって、マリリン・モンローの時は、奥さんが自殺未遂を起こしている。などと書いてあるので、モンローをのぞいてみたが、モンタンの名前はなかった。が、日本人の名前があった。

マリリン・モンローが日本で風邪をひいて、治療のため呼ばれたのが、浪越徳次郎で「指圧の心、母心、押せば命の泉わく」、彼は全裸のモンローに指圧を施した。

モンローは、１９６２年８月に36歳で死去。ジョン・Ｆ・ケネディ大統領との噂もあって、死因は自殺、急死、謀殺説まである。

モンローを司法解剖した監察医は野口常富。戒名までつけた人もいる。キックボクシングの解説で知られた寺内大吉和尚。

ちなみに、モンローの戒名は、「鞠利院不滅美色閲浪大姉（まりりいんふめつびしょくもんろうだいし）」。

▼「世の中馬鹿なのよ」と話していて、「上から読んでも下から読んでもヨノナカバカナノヨ」という中島みゆきの歌があったと思った。

「タケヤブヤケタ」と同様に、上から読んでも下から読んでも同じになる文章を回文というようだ。

「山本山」というノリのコマーシャルもあったが、個人の名前でも回文がある。福田前首相の義兄で、越智通雄という代議士がいたが、この人は、選挙の際、上から読んでも、「おちみちお」、下から読んでも、「おちみちお」、中に「み」のあるおちみちおです。と選挙カーで連呼していたようだ。

ところで、極めつけの回文を見つけてしまった。

「ヘアリキッド　ケツニツケドッキリ　アヘ」。

▼そんな、どうでもいい話も含め、「ほっとらいん」は60号を迎えました。

町議会に初当選した平成三年以来、足掛け18年になります。

34歳の美青年もいつのまにか52歳、メタボの腹回りを気にしながら、五十路をのしのし歩いています。

何の反応もなく、「こんな新聞、いくら書いても一体どれだけの人が読んでくれているのか、何の価値があるのか」と思ったこともありました。

全部、自分一人でパソコン編集しているといっても、本代も含めれば、経費は年間三百万円相当になり、県議会に出て10年、町議会から通算するといくらになるのか、正直、娘三人の顔が浮かんだこともありました。

それでも、「還暦号」を迎えることが出来たのは、「ワチ、この新聞好きなんや」、「いつも読んでるでの」という声だったように思います。事務所に新聞代だとカンパを届けてくれるおばあちゃん、最高です。

▼男子ゴルフツアー最年少で初優勝を飾った石川遼君は、十七歳で高校二年生、うちの娘たちから、「タメ」（同い年）だと聞いて驚いたが、それ以来、何か親近感を持つようになった。

ほっとらいん第一号を発行した平成三年生まれが今年十七才。

その娘たちも、先日、ソフトテニスの県大会新人戦で優勝したようで、賞金はなかったが、賞状は見せてもらった。先生は、「ソフトテニスでメシは食えない。しっかり勉強しろ」とおっしゃるようで、良い先生にめぐり合うこともまた幸運なことである。

▼「自分の物差しで他人を計るなよ」「嫉妬とヒステリーで事を起すなよ」「他人の才能には敬意を払えよ。それが自分の才能を高めることになるのだからな」「揶揄と誹謗からは何も生れないぞ」

亡くなった阿久悠が、息子と風呂場でそんな話をしたという記事を読んだが、娘の場合は、どこでしたら良いのだろうか。

男というものは、いくつになっても、あの紙飛行機を折って飛ばす稚気を抱いていたい。

一枚の紙と小さな窓さえあれば、どんな世界へも飛んで行ける。

自分の心を乗せて飛ばすことの出来る紙飛行機、〝男は心に紙飛行機を〟それが阿久悠の持論だった。

「ゆうべ　どこにいたの？」
「そんなに昔のことはおぼえていない」
「今夜あってくれる？」
「そんなに先のことはわからない」

映画「カサブランカ」の中の有名なセリフである。

「今夜も遅くなる？」、女房からのメールに「そんなに先のことはわからない」と答えたらどうなるか、余計な紛争を起こす必要はない。

かつては、「ダンディズムが存在しない世の中なんて死んだほうがまし」というその想いの具現者だったジュリー（沢田研二）も還暦を迎えたようだ。

化粧もやめ、体形もそれなりになったけど、深みも味わいも増した充実した集大成のステージを展開しているという記事を読んだ。

「僕らきれいな大人になれたかな」とかつての仲間に思いをはせた歌もあるようだ。

▼「きれいな大人になる…」。

還暦は、原点に戻ること。難しい時代であればこそ、原則を大事にしていきたいと思います。

印刷屋のカトちゃんが、「よくまあ続いたものだ」と還暦祝いに、表紙をカラーにしてくれました。

山にゆきて何をして来る
山にゆきてみしみしあるき
水のんでくる

（高村光太郎）

小春に。